履　歴　書

令和5年9月21日現在

ふりがな	あざい　はつ　　じょうこういん	男・女
氏　　名	浅井 初　　（常高院）	
生年月日	永禄13 年生まれ	

ふりがな　おばましおばまあさまいちばんち　じょうこうじ	電話　0770-53-2327
現住所（〒　　－　　） 福井県小浜市小浜浅間 1番地　　常高寺	E-mail
ふりがな	電話
連絡先（〒　　－　　）（現住所以外に連絡を希望する場合のみ記入） 黄泉の国	E-mail

西暦	和暦	歴
1570	永禄13年	北近江の小谷城で浅井長政とお市の方の次女として生まれる
1573	天正 1年	織田信長の弟信包の居城に母お市と長女 茶々、三女 江とともに引き取られる。
1582	天正10年	母お市が柴田勝家と再嫁し、長女 茶々、三女 江とともに越前北之庄城へ転居
1583	天正11年	賤ヶ岳の戦いの後、長女 茶々、三女 江とともに秀吉に引き取られる
1587	天正15年	秀吉の計らいで、高次（25 歳）お初（20 歳）結婚
1600	慶長 5年	高次夫妻 東軍に組し、大津城に籠城して西軍 1 万 5 千の兵を足止めにした功績により、11 月、高次 家康より若狭８万５千石を与えられ、小浜へ
1609	慶長14年	夫・京極高次が死去すると、お初は剃髪・出家して名を常高院と改める
		甥・豊臣秀頼と徳川家康の対立が起こり、豊臣側の使者として仲介に奔走する
1614	慶長19年	大坂冬の陣の際に、大坂城に入って織田有楽斎と共に和睦を模索、徳川勢の阿茶局と交渉して和議に尽力
1615	慶長20年	「大坂夏の陣」で、再び豊臣家と徳川家が対立。
		このときも大坂城へ入り、最後まで和睦に尽力したが、姉・茶々の決意は固く大坂城は落城。姉・茶々を救えなかった。
1630	寛永7年	小浜に寺建立を発願
1633	寛永10年	64才で江戸にて永眠

お初は、戦国の世の厳しさを味わいながらも、嫁いだ先の京極家の繁栄を成し得て、侍女達からも大変好かれていたと伝わる優しい人柄でした。
お初が亡くなったときには、侍女達が一斉に剃髪をしたという話が残されているほど、人望の厚い女性だった

「お初」のちの「常高院」は、1570 年（永禄 13 年）に戦国大名「浅井長政」と、「織田信長」の妹である「お市」との間に二女として誕生。
当時、浅井長政と織田信長は、同盟を結んでいて平穏な日々が流れていました。
ところが、1573 年(天正元年)に、織田信長・徳川家康連合が浅井氏の「小谷城」を攻撃。戦いに敗れた浅井長政は、自害しました。
母のお市は、三姉妹を連れてお城を脱出し、兄の織田信長に保護されました。

姉はのちに「豊臣秀吉」の側室となる「茶々」のちの「淀殿」、妹はのちに徳川幕府 2 代将軍「徳川秀忠」の正室となる「お江」のちの「崇源院」。
血筋の良いこの 3 姉妹は、戦国時代における天下の覇権争いに深くかかわる女性として、歴史に名を残すことになります。

父の死と 1 度目の落城
お初は、その生涯で何度か落城を経験しますが、1 度目の落城を経験したのは、わずか 4 歳のとき。お初が生まれた 1570 年（永禄 13 年／元亀元年）に織田・徳川連合軍と朝倉軍が衝突した金ヶ崎の戦いで、浅井軍は織田信長を裏切って対立します。
そののち姉川の戦いなどを経て、1573 年（天正元年）本拠地の小谷城を包囲された「小谷城の戦い」で、お市の方と 3 姉妹を逃がしたのち、父の浅井長政は自害。
城を追われたお市の方と 3 姉妹は、そのあと織田信長に保護され、伯父「織田信包」や、お市の方の叔父「織田信次」のもとに預けられました。

母の死と 2 度目の落城
1574 年（天正 2 年）に織田信次が戦死したのち、織田信長の居城「岐阜城」に転居し、しばらくは穏やかな時間を過ごしたお初達でしたが、1582 年（天正 10 年）に「明智光秀」が謀反を起こし「本能寺の変」によって織田信長と嫡男「織田信忠」が急逝。明智光秀は「山崎の戦い」によって豊臣秀吉に討たれましたが、織田家の後継者争いに、お市の方と 3 姉妹も巻き込まれていきます。

本能寺の変のあと、母・お市の方は織田家の宿老「柴田勝家」に再嫁し、お初達は越前国「北ノ庄城」のちの「福井城」に転居。

しかし、柴田勝家は翌年の 1583 年（天正 11 年）、織田家の覇権争いである「賤ヶ岳の戦い」において豊臣秀吉に敗れ、北ノ庄城にて母・お市の方と共に自害したのです。
お市の方は豊臣秀吉に宛て、娘達の助命嘆願書を書き、城から 3 姉妹を逃がしました。そうして保護されたお初達 3 姉妹は、実父、養父を共に滅ぼした豊臣秀吉の庇護下に入ることとなったのです。

京極高次との結婚　　（幼馴染との婚姻）
1587 年（天正 15 年）、お初が 18 歳のときに豊臣秀吉の計らいで、7 歳年上であった「京極高次」のもとへ嫁ぎます。
京極高次は、南北朝時代の婆沙羅大名「佐々木道誉」直系の子孫で、お初とは同じ小谷城で生まれた幼馴染。さらには従兄弟同士でもあったこの 2 人は、恋愛結婚だったと言います。

京極高次は、本能寺の変の折に明智光秀に味方をする等、決して武将としての能力が高いとは言えず、京極高次の妹「竜子」が豊臣秀吉に気に入られた恩恵で大名として出世しているので、当時は「蛍大名」というあだ名が付けられていました。
お初と京極高次の夫婦仲は良好で、竜子との関係も良く、竜子が豊臣秀吉に嫁いだときに受けた「知行地」を、お初が譲られているほど。2 人の間には子供ができませんでしたが、お初は側室の息子を引き取り、京極家の嗣子として育て上げました。その子がのちの「京極忠高」で、血がつながっていなくとも、誰よりもお初を慕っていたと言います。

夫の死
1600 年（慶長 5 年）の「関ヶ原の戦い」では、京極家は東軍へ与し「大津城」に籠城。西軍に付いた、九州一と言われる猛将「立花宗茂」らの足止めをし、大きな功績を挙げたことが「徳川家康」に認められ、京極家は若狭国一国を手に入れました。
関ヶ原の戦いののち、1609 年（慶長 14 年）に夫・京極高次が 47 歳という若さでこの世を去ると、お初は剃髪して出家。名を常高院と改めました。
この頃から、姉がいる豊臣家と妹がいる徳川家の関係が悪化の一途を辿って行ったのです。

大坂夏の陣とお初の政治的手腕
ついに 1614 年（慶長 19 年）には、「大坂冬の陣」が勃発。

お初は徳川家康に両家の仲介を頼まれ、豊臣家側の交渉役を担うこととなりました。お初は、息子・京極忠高の陣中で徳川家側の交渉役「阿茶局」のちの「雲光院」と会談します。
この会談で大坂城の外堀を埋めるなどの条件を付け、一旦は和睦となりますが、翌年 1615 年（慶長 20 年）「大坂夏の陣」で、再び豊臣家と徳川家が対立。

常高寺

お初はこのときも大坂城へ入り、最後まで和睦に尽力しましたが、姉・茶々の決意は固く大坂城は落城してしまいます。
徳川家康の孫で「豊臣秀頼」の妻「千姫」らの助命嘆願も聞き入れられず、茶々とその息子・豊臣秀頼は、自刃しました。
もともと仲の良い 3 姉妹でしたが、長姉・茶々が亡くなった大坂の陣以降、江戸城内にてお初と妹・お江は会うことが増え、仲良く過ごしている姿が頻繁に目撃されました。

お初の晩年

徳川家の天下となると、お初はお江と徳川秀忠の四女である「初姫」を、京極家の当主となったお初の息子・京極忠高に嫁がせます。これは、徳川家の血を入れることで京極家の安定を図ろうとしたためですが、この 2 人の夫婦仲は非常に悪く、20 歳で早世した初姫の今際の際でさえも、京極忠高は外遊していたと伝わるほど。お初の余生は 2 人の関係に悩まされる日々となったのです。

お初（常高院）の墓

1633 年（寛永 10 年）お初は 3 姉妹のなかでは一番長寿の 64 歳で永眠。
最後まで波乱万丈な人生を過ごしたとも言えますが、彼女の手腕が京極家をのちの世まで繁栄させたことに違いはありません。
そのあと、京極忠高も 45 歳という若さで亡くなりますが、跡継ぎがいなかった京極家の領地が「改易」とならなかった理由のひとつに、お初の功績があったためだと伝わっています。
お初は、戦国の世の厳しさを味わいながらも、嫁いだ先の京極家の繁栄を成し得て、侍女達からも大変好かれていたと伝わる優しい人柄でした。お初が亡くなったときには、侍女達が一斉に剃髪をしたという話が残されているほど、人望の厚い女性だったのです。